

古いも若いも会員の大部分は、洛北の秋を訪れたであろう。京都では大抵の所が踏み荒されたが、八瀬大原の洛北は、まだ被害を受け居ない。学生時代の探秋。若い会員には、交通機関が発達したので散歩位にしかならなくなつた。

(洛北三千院の庭)

# 洛友会報

京都市左京区吉田  
京都大学工学部  
電気科教室 内会  
洛

## 北 南 米 旅 行 の 回 忆

昭一三

服 部 行 草

今年の土用も毎日蒸し暑い日が続きます。丁度九ヶ月前には、地球の裏の南半球で夏を過ごしましたので日本の夏がやつて来て、南米のこと思い出し、その回想を御紹介することに致します。

日本製真空管も最近は海外へ輸出されるようになりました。そこで南米・ブラジル・アルゼンチンの日本製ラヂオ部品、特に真空管の市場調査に昨年十月から約三ヶ月出かけ往々及び帰途に米国に立ち寄りました。米国は電気通信の尖端を行くだけあって一般民衆関係方面の新しいものは、カラーテレビでしようと日本で初めてテレビが町に売り出されたときの様子によく似ています。RCAビルの入口に廿一時のセントがあり、午後三時より公開していました。セントの周りに紐育ツ子が集っています。何分コストが六五〇ドルはしますので一般への普及はその当時ではまだまだで、レストランでカラーテレビの有る店は極く少なく、有る店は表にカラーテレビ有りと宣伝している程度です。一九五六年には大セセットメークーはコスト低減をして一般への普及に努力するようですが、又一般大衆の電子工学の興味をそぐるようRCAの陳列所にはテレビ、ハイファイその他電子機器の原理が解り易いように説明付きで陳列されています。アメリカ学生の間ではハイファイ又はFMセントの熱が盛んなようです。ボストンで日本人の留学生に、彼の自動車で町を案内して貰いましたが、大部分の学生は自動車を持つていてことは全く羨ましい限りです。

アメリカの工場の新しいのは郊外に建築され、建物の他に自動車パークの敷地を持つていています。テ

ラジオは北米と趣きを異にしています。こゝは南米諸国の中で唯一のポルトガル語使用国です。従つて風俗習慣は南欧風です。首府リオデジャネイロは世界三大美港の一つだけあって、海岸にそびえる「パウデアスカ」の偉容、又コルコバードのキリスト像が海空のコバルト色と对照して誠に美しい景色です。この国は工業の中心はサンパウロです。政府は工業発展に力を入れ、新しい工場がドンドン建っています。テレビ局は三局あり、民間放送で無料聴視です。セントは廿一時が大部分で、メークーも数多くあります。然し技術者は少く新聞広告で募集しているのも目に立ちます。サンパウロは海拔八五〇メートルの高原に発達した町です。その夏でも丁度比叡山の頂上のよう夜は毛布無しでは寒い位です。日中でもオフィスではノータイの人を見当たりません。日本の夏のよう油汗をかいて、扇子を用いるようなこともありません。食物は豊かで特に果物は新鮮で、日本よりは住みよい所です。女尊男卑の傾向はこれで見られます。生活が楽です。結婚年令は早く、結婚のときは日本サンパウロに多く、種々の事業に従事しています。成功した人は巨万の富を持っています。私の滞在中、第一回の学士会が開かれました。大学を出たばかりの人も数人居つて一生

ブラジルに住むつもりで来ていることを聞き、全く頼母しく思われました。ラヂオ・ラヂオ・真空管工場を見ました。昨年の革命以来、ペロンの独裁が無くなり、言論の自由を取りました。労働者はペロン時代に大変優遇されていました。テレビ局はものを作られています。テレビ局はならないほど立派なもので、一般的にセントは廿一時の豪華なものです。食糧は特に肉が豊富で、ビーフステーキの上等が安く食べられます。アルゼンチンと言えば「タンゴの国」とも言いつけて到る所でタンゴの名曲が聴けます。ホテルは夜遅くまで若い男女で賑かで、日本のホテルとは感じが別で、一般的で快楽的ではなく健全なもので、商店街は美しく丁度四条通りのようなコリエンテス、心斎橋通りのようなフロリダ通り、五条の新道路の更にスケールの大きな世界第一の大通りノーベデフリオ通りは、ブエノスアイレスの目貫き街でしょう。その他の街々は歐州風で街路樹が多く、一般に街中は狭く、電車はその狭い町を一方交通で走っています。その前にロダンの「考える人」の像があります。この国の工業は外国依存で、工科大学も少く日本とは比較にならない程です。従つて技術者も不足ですが、日本より移民は今の処では出来ません。

日本は電気通信機器が海外に輸出され、好評を得ていることは私達にとっては誠に喜ばしいことです。前途有望の若い学生諸君も将来海外に技術を延ばされることを期待して下さいません。(新日本電気株式会社勤務)



× 既で女中専用の浴室まで有るといふ豪華さや、食物大量仕入れの習慣より電気冷蔵庫は全くの必需品化し、君も十二立方のが帰るときには狭さを感じたとの話。役人は低給だらが役徳は当たり前で僅かな汚職で首になる日本本を氣の毒がるとの話。どんな偉い人でも先づ話はエロに始まり延々飽くことなく数時間に及んで漸く帰りがけに用件を話すといううと、御薦書もさこそ想像された次第。折角覚えても本国・アモイ・チモール位しか通用せぬポルトガル語であり、風俗習慣の消化にも数年を要するこのような土地に二年位で人の交替は無理であり、半生を暮らすような人の派遣が必要との御意見には全く同感、尽きぬお話を全く愉快な一夕を過ごした。

昭和三十年卒業生クラス会

う豪華さや、食物大量仕入れの習慣より電気冷蔵庫は全くの必需品化し、君も十二立方のが帰るときには狭さを感じたとの話。役人は低給ながら役徳は当たり前で僅かな汚職で首になる日本本を氣の毒がるとの話。どんな偉い人でも先づ話はエロに始まり延々飽くことなく数時間に及んで漸く帰りがけに用件を話すといううと、御薙蓄もさこそと想像された次第。折角覚えて本國・アモイ・チモール位しか通用せぬポルトガル語であり、風俗習慣の消化にも數年を要するこのような土地に二年位で人の交替は無理であり、半生を暮らすような人の派遣が必要との御意見は全く同感、尽きぬお話を全く愉快な一夕を過ごした。

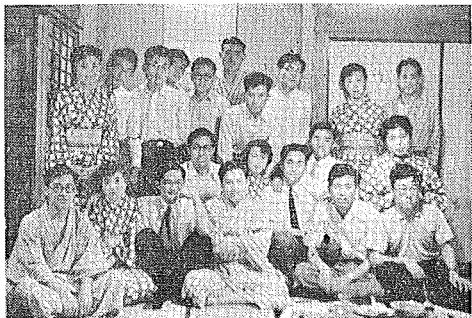
旅行と言えは良く聞えるけれども、總て旅行は人間の放浪生活の名残りであるらしい。だから申歳生れの進化の低い学生の集つた院二回生は、十数日間に及ぶ長期旅行に出かけた。行先は現在の日本で一番遠い所北海道である。この旅行には東京で三十年度卒業生のクラス会を開く附録が付いている。

さて、羊蹄丸にて北海道に無事上陸し第一日目は北大を訪れた。應用電気研究所を見学し、北海道色の溢れた研究内容に幾多の興味を覚え、予定時間を超す有様であつた。定山渓にて旅の汗を流し、翌日は旧月寒種羊場を訪れ近くには牛・綿羊の放牧を、遠くには石狩平野を眺めては

ある。支笏湖を経て第三日目に小牧王子製紙工場を見学し、一本の木が一枚の新聞紙になる過程を眺め、製紙に多量の電気が使用されることを知った。次に北海道の最南端襟岬に至る。岬の先端に立つと両側に伸びる海岸線は地図を見る如く遠方まで眺められる。この頃になると旅の疲れが出て来たのか全体の空気が沈滞して来る。その名が示す如く工事に多大の費用を要した黃金道路を通り抜けて帶広に向う。途中車窓より眺める十勝平野の耕地、アカシヤの風雪防林にも北海道の風情が偲ばれる。帶広での宿泊地十勝川にて女子大生一行と出会い、前日の沈滞した空気も消し飛び俄然活気づく。六日目には車中霧のため日本八景狩勝跡<sup>1</sup>を見る。濃霧のため見よ

碧の湖水に雲が二つ三つ浮んでいるのが眺望出来た。十一日目、早朝車窓より石狩炭田の工業地帯を左右に眺め、アイヌコタン（部落）白老に着く。北海道を訪れる人の多くは、アイヌ民族に対して興味と関心を持つてゐる。そして現在も尚アイヌ人が原始生活をしているかのように考へてゐる人が多いが、現在では日本人と全く同じ生活をしてゐる。そうして彼等のエカシ（老翁）の所有している家宝は、その昔江戸時代に熊の毛皮と交換した大名たちの家具類である。湯気立つのぼる登別にて夜行の疲れを癒やし室蘭の日本製鋼所に向う。電源開

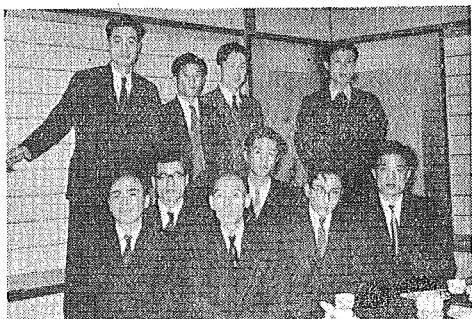
鍊されてゐる有様を、更には各種の  
圧延機を見学する。洞爺湖々上遊覽  
後、昭和新山に登り地球が現在も尚  
お躍動している有様を間の辺りに感  
じた。いよいよ旅行も終りに近づき  
道立公園大沼を訪れた後、函館山に  
登り後方に赤青の屋根に彩られた函  
館市街を前方に津軽海峡を眺めて往  
時と同じ羊蹄丸に乗船し、終夜北海道  
の土地を離れた。斯くして湖沼美の  
阿寒、海岸美の襟裳、山岳美の大  
雪を訪れ、更には内地で見られない  
数々の工場を見学してこの長期旅行  
の幕を閉ぢた。



(設備技術研究所專務理事)

一九五六年六月三十日  
西川牌木器工具  
船和世年度  
於淡季新作  
販賣會  
大正三  
三  
一

京の地より最も遠い網走に着き、博物館を訪れ当地の先住民族の生活様式を偲ぶ。併行に走る電柱と二本の線路が一点点に溶け合う所まで続く濤払湖畔に親子づれの馬を見ては「ノルマンディーの牛になりたい」という言葉も言ってみたい気がした。いいよいよ旅行の頂点、阿寒国立公園に至る。美幌峠ではアイヌの神話を中心めた屈斜路も白い霧の羽衣に身を包みて姿を見せない。峠は総て塗りを受けるらしい。最も期待していた摩周湖も濃霧に閉ざされ湖面さえ見えず一行の失望も大きい。待てば海路の日和ありの言葉通り約二時間待つ。その間遙々持参した碧鱈に向つて基を打つ者が、霧の晴れるのが



松田先生を囲んで洛窓会  
昭和廿九年卒業の関東在住者は十五人ばかり居りました。名の下に卒業当初より時々クラス会を行つて居りました。この会には三月十日、松田先生の御上京を機会にと寄せ書です。会場は上村、松村両君の世話を日黒に有る日立製の際松田先生から色々有益なお話を伺うことが出来た。

すが「洛窓会」の  
所の上大崎荘。そ  
ういふ会合でし  
りました時の写真  
（間瀬光朗記）

碧の湖水に雲が二つ三つ浮んでいるのが眺望出来た。

十一日目、早朝車窓より石狩炭田の工業地帯を左右に眺め、アイヌコタン(部落)白老に着く。北海道を訪れる人の多くは、アイヌ民族に対して興味と関心を持つてゐる。そして現在も尚アイヌ人が原始生活をしてゐるかのように考へてゐる人が多いが、現在では日本人と全く同じ生活をしている。そうして彼等のエカシ(老翁)の所有している家宝は、その昔江戸時代に熊の毛皮と交換された大名たちの家具類である。湯気立つのぼる登別にて夜行の疲れを癒やし室蘭の日本製鋼所に向う。電源開

鍊されてゐる有様を、更には各種の  
圧延機を見学する。洞爺湖々上遊覽  
後、昭和新山に登り地球が現在も尚  
お躍動している有様を間の辺りに感  
じた。いよいよ旅行も終りに近づき  
道立公園大沼を訪れた後、函館山に  
登り後方に赤青の屋根に彩られた函  
館市街を前方に津軽海峡を眺めて往  
時と同じ羊蹄丸に乗船し、終夜北海道  
の土地を離れた。斯くして湖沼美の  
阿寒、海岸美の襟裳、山岳美の大  
雪を訪れ、更には内地で見られない  
数々の工場を見学してこの長期旅行  
の幕を閉ぢた。



會費領收

七月二十日より九月二十日まで到着の分

昭和二十九年度 昭和三十一年度  
昭和二十八年 昭和二十九年  
昭和二十七年 昭和二十八年  
昭和二十六年 昭和二十七年  
昭和二十五年 昭和二十六年  
昭和二十四年 昭和二十五年  
昭和二十三年 昭和二十四年  
昭和二十二年 昭和二十三年  
昭和二十一年 昭和二十二年  
昭和二十年 昭和二十一年  
昭和十九年 昭和二十年  
昭和十八年 昭和十九年  
昭和十七年 昭和十八年  
昭和十六年 昭和十七年  
昭和十五年 昭和十六年  
昭和十四年 昭和十五年  
昭和十三年 昭和十四年  
昭和十二年 昭和十三年  
昭和十一年 昭和十二年  
昭和十年 昭和十一年  
昭和九年 昭和十年  
昭和八年 昭和九年  
昭和七年 昭和八年  
昭和六年 昭和七年  
昭和五年 昭和六年  
昭和四年 昭和五年  
昭和三年 昭和四年  
昭和二年 昭和三年  
昭和一年 昭和二年  
昭和零年 昭和一年

七月二日札幌駅集合、七月十四日函館解散という凄まじいプランによつて、大学院二回生一同は、とかく精進の悪いのが集つたせいか、今年の気候のアブノーマルのせいか、北大・月寒種羊場・王子製紙・日本鋼管等を結んで北海道内各地を研究旅行の名のもとに大名旅行と洒落れ込んだ。悪天候とは言え名所各地と見学とが晴と雨に一対一対応だつたので大名の方々は御満悦、道内の雄大

な景色を楽しみつつ、「旅は道づれ」とやらで他的大名行列の中に繰り込んだり、分裂したり、人数が定員より増えたり、減つたりするので進行係も一通りではなかつたが、東京在住の諸君の祈り申斐もあつてか、無事故で東京にたどり着くことが出来た。最後に、この旅行及び見学について色々お世話を下さった諸先生方並に諸般の方々に御礼申上げます。

( 奧本記 )

昭	一	一一	一一	一	八	七	六	六	五	四	三	二	一	〇	九	八	七	六	五	四	三	二	五	四	三	二	一九	七	六	五																		
伊	船	清	西	井	村	小	野	土	村	横	榎	山	皆	平	安	森	吉	坂	城	重	北	川	平	善	桂	公	吉	北	矢	東	富	福	赤	廣	山	渡	口	遠	水	異	片	江	大	中	岡	保	伊	井
橋	樺	原	村	上	田	林	田	倉	上	山	垣	本	川	田	岡	田	光	本	戸	見	川	田	野	積	文	留	勝	野	山	山	松	瀬	田	邊	羽	藤	内	岡	本	山	森	添	寿	沢	上			
義	礼	道	太	正	忠	三	行	義	貴	千	良	直	元	隆	忠	道	通	勤	勝	儉	徳	幸	保	正	善	太	一	一	玉	主	良	太	三	駿	茂	柳	康	辰	亟	正								
一	藏	也	郎	武	孟	男	郎	三	賢	一	雄	二	穰	衛	行	房	勉	久	生	雄	哉	稔	晃	一	勝	夫	実	喜	已	男	郎	勉	薰	夫	治	雄	人	馬	浩	知	郎	介	雄	吉	象	雄	二	
楠	松	山	伊	甲	香	長	義	松	熱	片	安	高	伊	西	井	大	喜	河	森	西	古	自	国	平	本	富	塩	林	熊	知	種	岡	西	池	光	松	中	三	長	村	宅	井						
本	橋	本	藤	斐	川	坂	井	尾	田	岡	岡	崎	地	村	上	曲	多	村	島	山	田	坂	友	野	中	村	津	谷	識	田	本	原	田	岡	本	村	宅	井										
陽	達	幹	久	靖	揚	孝	胤	三	高	之	喜	光	利	一	俊	治	泰	五	安	利	五	克	角	精	一	三	兼	太	一	藤	吉	經	久	長	亮	要	藏											
一	郎	良	次	照	一	影	郎	勤	示	助	久	一	夫	郎	彥	夫	雄	郎	三	利	郎	要	郎	已	市	雄	均	郎	則	郎	吉	喜	彰	三	豊	藏												

昭二五  
昭三  
昭三十二年  
度  
荒小川  
木  
川崎田居尾  
本所中  
野本所中  
谷川  
橘  
昌久博宗太隆欣  
利安  
淳洋和雄一宏郎昭治晃徹  
正昭春芳善二昭太哲武  
吉喜晴謙信允叔雅盛  
晴正健幸純照  
輝之  
憲助  
良浩浩男三也通信郎一郎夫三美昭藏彦三一夫一夫廣男彦一雄朗彦  
介二臣男二也通信郎一郎夫三美昭藏彦三一夫一夫廣男彦一雄朗彦  
昭二九  
新  
三一  
三〇  
二八  
二七  
二六  
二五  
二四  
二三  
二二  
二〇  
一九

相中山梶津木西三林西藤塙  
馬村崎島田村川好 内山田路  
敬 義曠 磐芳良敏 節章孝  
司皓夫美宏 根邦一也敏男治夫